宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

離島の小中学校にみる海洋教育の実践状況：長崎県新上五島町を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 周作 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5690

宮崎大学教育文化学部紀要　社会科学　第33号（2015）1-17頁

離島の小中学校にみる海洋教育の実践状況
－長崎県新上五島町を事例として－

中村周作

The Educational Practice of Oceanography at the Elementary and Junior Hight Schools on Isolated Islands
－A Case Study of Shin-Kamigotoh Town in Nagasaki Prefecture－

Shusaku NAKAMURA

１．はじめに

海洋教育は，一般にはまだ馴染みの薄いものと言えるが，海洋基本法[1)]に基づき，海洋と人類の共生を図る事を目的に，海洋環境の保全を図りつつ国際的な理解に立った平和的かつ持続可能な海洋の開発と利用のための知識，技能，思考力，判断力，表現力を有する人材の育成を目指すものとされ，海に親しみ，海を知り，海を守り，海を利用する学習と規定されている[2)]。実際の教育現場，特に海に親しみやすい沿岸を中心とした地域では，従来から海に関わる様々な教育的取り組みがなされてきた。そこで，本稿では，周りを海に囲まれ，海に日常的に接する機会が多いと考えられる離島を研究対象地域として設定した。離島にも大小様々な規模のものがあるが，ここでは，多様な取り組みの状況を把握するために，町的地域を含む規模の大きな離島として，長崎県新上五島町の主部を占める中通島，および若松島を取り上げる。島内の小中学校11校（図１）を対象として，教育現場で，具体的に海洋に関わるどのような教育実践がなされているのか，また，その教育における課題等がどのようなところにあるのか，それらの地域的な違いなどについて，具体的な聴き取り調査[3)]をもとに検討する。

次章では，その調査の成果を学校ごとにみていく。

２．海洋教育の実施状況（各校の取り組み）

１．青方小学校（所在地：新上五島町青方郷1460-1）

本校は，児童数１年生15人，２年生27人，３年生26人，４年生22人，５年生22人，６年生30人の計142人あり，有川小学校に次ぐ規模を持つ。本校での海洋教育（体験学習）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「カサゴ放流体験」 これは，総合的な学習の２時間を使い，５年生を対象学年として，昨年６月に実施した。活動内容としては，①漁協関係者より，カサゴ放流の目的に関する講話を伺った後，②カサゴの稚魚2,000匹の放流を行った。この授業実施のきっかけは，漁協から声がか

図１　研究対象小・中学校の分布

かって行うことになった。

今回の授業についての児童の反応をみると，放流時に「大きくなってね」，「元気にがんばってこいよ」など声をかけながら稚魚を海に送り出していた。

児童の感想としては，「こんなに小さい魚を初めて見た。大きくなれるかなと心配になった。だから，がんばって大きくなってねと気持ちを込めて海に流した」。「朝早くから準備してくれた漁協の人に感謝しありがたいなと思った」。「卵から育てて放流し，またとって食べることを学んだ。魚を食べる時，いつも以上に感 謝して食べようと思った」。「放流した稚魚の中で，生き残れるのはごくわずかと聞いてかわいそうだと思った」。「放流された稚魚たちが大きくなった姿を見たい」。「命の大切さを思い返す，とても勉強になる体験ができた」。「たくさんの稚魚が育てられていることを知って驚いた。稚魚が他の魚に食べられないように，死なないように育てているなんてすごい。ぼくそんな人になりたい」。

教育効果をみると，雨の中での活動となったが，約2,000匹のカサゴ稚魚を放流でき，とても貴重な体験となった。放流後は，事前に渡していた児童のたくさんの質問に，漁協の方が丁寧に答えて下さり，資料もいただいて学びを深めることができた。命をいただいているということ，それを支える方々への感謝の思いを子どもたちとともに改めて実感できた。

その他，昨年度の授業として，４年生を対象に，役場からの出前講義で「同町の水産業」を学んだ。以前，かまぼこ作りもやっていた。

「宿泊体験」　これも総合的な学習として５年生を対象に，浜ノ浦「長崎県立上五島海洋青

写真１　青方小学校掲示の稚魚放流体験報告

少年の家」[4)] で１泊２日の宿泊を行い，シーカヤックやシュノーケルを体験した（参加者142名）。

２．上五島中学校（所在地：新上五島町青方郷538）

本校は，町内の４つの中学校が合併して30年前にできた。現在，生徒数は，１年生70人，２年生66人，３年生72人の計208人を抱える島内随一の規模を誇る中学校である。本校での海洋教育（体験学習）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

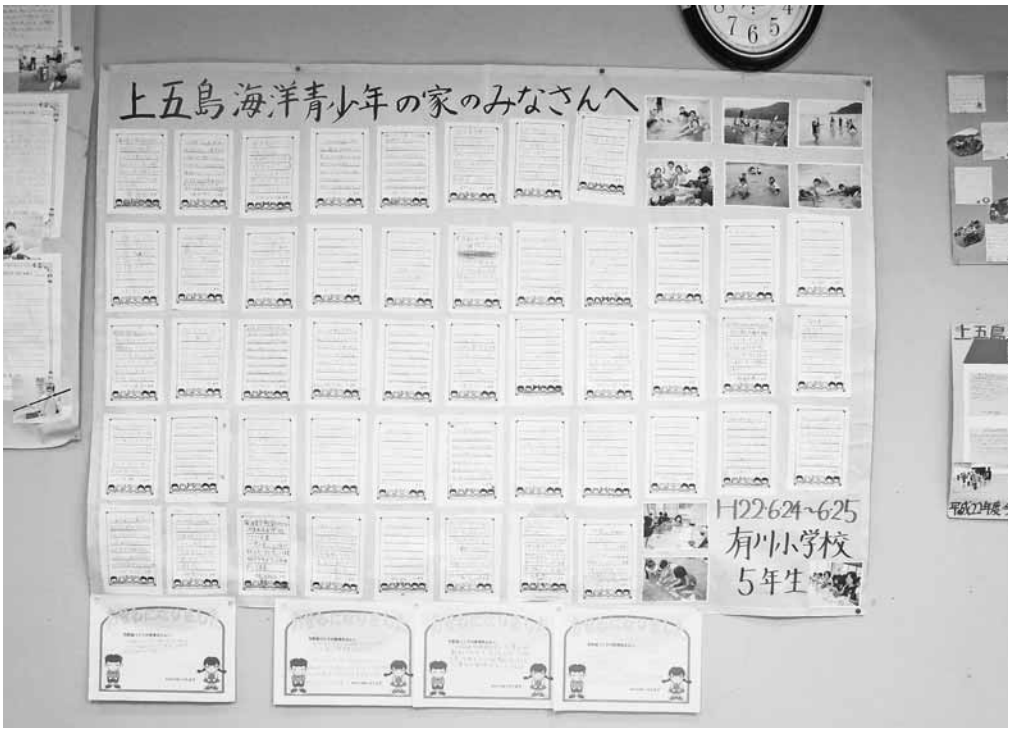
浜ノ浦「長崎県立上五島海洋青少年の家」でのシーカヤックやシュノーケリング体験学習

これは，１年生を対象に，毎年７月に実施している。この体験学習は，「長崎県立上五島海洋青少年の家」ができた20年ぐらい前から，毎年実施している。なお，町内のほとんどの小中学校で「長崎県立上五島海洋青少年の家」を利用した宿泊体験学習を行っている。そういった意味でも，「長崎県立上五島海洋青少年の家」は，海洋教育の拠点である。

写真２～11　「海洋青少年の家」食堂掲示の体験に対する各学校・生徒による感謝の言葉

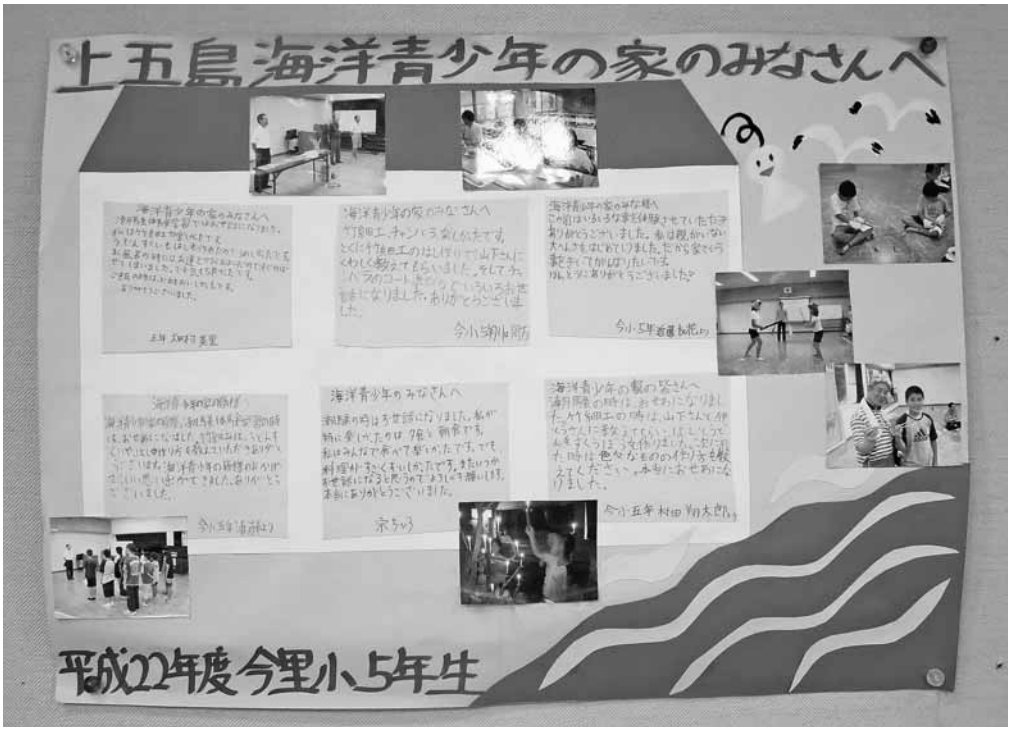
青少年の家のみなさんへ
1年
有川中学校2組

有川中学校1年3組
青少年の家のみなさんへ


上五島海洋青少年の家のみなさんへ
H22.6.24~6.25
有川小学校
5年生

上五島海洋青少年
の家の皆様へ
H22.6.22,23
北魚目中学校一年生一同

上五島海洋青少年の家の
みなさんへ
H22 魚目中学校 1年


上五島海洋青少年の家のみなさんへ
平成22年度今里小5年生

ありがとうございます
上五島海洋青少年の家
のみなさんへ
若松東小学校
5年1組より

奈良尾小学校
青少年の家のみなさんへ
五年生より

３．今里小学校（所在地：新上五島町今里郷245-9）

本校は，児童数26人の今里漁村にある小規模校である。本校での海洋教育（体験学習）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「魚の調理・会食」　これは，総合的な学習の時間２時間を使って，５・６年生を対象として10月に行うことになっている（調査時点での話）。活動内容としては，地元の漁業士会の方の指導で魚をさばいてすり身揚げを作り，皆で会食をする。本活動を行うきっかけは，漁業士会が主催して，年１回町内の学校を回って指導を行っている中ででてきた行事である。児童の反応をみると，子どもたちは，漁村の子で慣れており，もくもくと作る感じである。

「無人島体験」　これは，５・６年生を対象として，８月に実施している。活動内容として，ＰＴＡの所有船でトウセン島に渡って，日帰りでいろいろな活動をする。昔は，地区子供会で無人島に渡り，魚釣りやバーベキュー，カレーを作って食べるなど毎年やっていた。今は子どもが少なくなって子供会活動ができないので，学校と地区住民の協力で取り組みを行っている。取組の目的は，地元の産業に関する知識と理解を深め，そのよさに触れて郷土愛を育む。また，地元漁業文化の継承・啓発を図ることにある。

昔は，アワビ，サザエが多く，子どもたちが小遣い稼ぎのために潜って獲ったりしていたが，乱獲で昭和40～50年頃からいなくなった。

その他，遠足時に「地引き網体験」を実施している。

４．若松中央小学校（所在地：新上五島町間伏郷74）

本校は，1996（平成８）年に神部小学校，日島小学校，間伏小学校の３校が合併し，さらに2014（平成26）年に若松小学校を統合して今日に至っている（本年で創立18年）。児童数が１年生８人，２・３年生13人，４・５年生13人，６年生12人の計46人である。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「養殖（マグロ）見学，餌やり体験」　これは，総合的な学習の３時間を使って３・４年生を対象に昨年実施した。活動内容としては，土井浦にある「宝生水産」（保護者の関係）にバスで出向き，生け簀内のマグロを見学，餌やり体験を行った。本活動の目的は，地元地域，地域の産業を知ることである。なお，昨年実施したが，本年の実施予定はない。

その他　ＰＴＡ主催の夏の海水浴は毎年やっているが，これは小学校としての取り組みではない。

浜ノ浦「長崎県立上五島海洋青少年の家」でのシーカヤックやシュノーケリング体験学習　これは，５・６年生を対象として若松東小学校の児童と一緒に毎年９月に実施している。

５．若松中学校（所在地：新上五島町若松郷462-13）

本校は，生徒数１年生が19人，２年生が29人，３年生が26人，計74人ある。本校の校区は，若松中央小学校と若松東小学校両校区であり，両校の卒業生が来る。島の中学校ではあるが，校区内に漁業・養殖業（特にブリ養殖）関係者は３～４人（かつては20ほどあったが減少），保護者にはいない。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「ブリ養殖業体験」　これは，総合的な学習の２時間を使って，２年生を対象に実施する授業である。活動内容としては，毎年数名が地元の養殖業で体験を行っている。活動の目的は，職場体験学習の一環として行っている。

若松は海に囲まれているが，海水浴場が１カ所しかなく，その他生徒が泳げる場所が４～５カ所あるのみである。生徒は，親に漁業関係者がいないこともあって，海に近いけども意識として海との間にかなりの距離がある。実際に海で遊ぶ機会がほとんどなく，海に潜れない子が多い。

浜ノ浦「長崎県立上五島海洋青少年の家」でのシーカヤックやシュノーケリング，飯ごう炊飯体験学習　これは，学校行事として６時間を組んで１年生を対象に毎年実施している。

６．奈良尾中学校（所在地：新上五島町奈良尾郷909-14）

本校は，生徒数が１年生10人，２年生14人，３年生11人の計35人ある。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「高井旅海水浴場の海岸清掃」　これは，総合的な学習の４時間を使って，全学年参加で毎年６月に実施している。毎年６月始めに実施される「トライアスロンin上五島」（2014年で第25回大会）に200名を超える出場者があり，島外客を気持ちよく迎えるために，大会の舞台となる高井旅海水浴場を毎年大会前と後，２回清掃している。それぞれ２時間程度かけて行い，ゴミが軽トラック一杯になる。ちなみに，トライアスロン参加者に対するおもてなしは，子どもを含め地域全体でやっている。たとえば，中学生が砂浜で拾ったきれいな貝をビンに詰めて参加者にプレゼントするなども，そういった活動の一例である。

「お魚教室」　これは，家庭科の授業２時間を使って，１年生を対象に，本年は11月に実施

する予定である（調査時点での話）。活動内容としては，漁協関係者をゲストティーチャーとして招き，アジを３枚におろしてフライにして給食で食べた。奈良尾でも漁業者が減り，今は漁師の子は少ない。家で普段から魚をさばいていて簡単にできる子もいるが，多くは魚を触るのに慣れておらず，楽しそうにやっている。慣れてくるとスムースにできるようになる。本活動の目的は，地域を知ることである。

７．奈良尾小学校（所在地：新上五島町奈良尾郷955-1）

今年（平成26年）４月に，旧奈良尾小学校と岩瀬浦小学校が合併して奈良尾中学校隣地に移転，新設された小学校である。児童数は，１年生12人，２年生８人＋３年生10人（複式学級），４年生13人，５年生８人，６年生16人の計67人ある。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「ウミガメのアパート」　これは，教科としては総合などの時間を使っている。活動内容としては，ウミガメが産卵に多く砂浜にやってくるが，そのままにしておくと卵が海水につかったりしてだめになることが多い。そこで奈良尾では地元の方が「ウミガメ守り隊」と称してコンクリート製の箱形を作り，なかに砂を入れてそこに卵を移して孵ったら海に戻す，俗に言う「ウミガメのアパート」を作っており，子どもたちがその観察を行っている。

写真12・13　　高井旅にあるウミガメのアパート

「地引き網体験」　これは，後串浜海岸で６月末～７月初め頃にPTA活動として全児童が参加して行っている。今年は，台風来襲直後で獲物は少なかったが，それでも50kgほど獲れたので，浜でさばいて刺身やミソ汁にして皆で食べた。その後，海岸清掃をして活動は終わりとなる。

「海の微生物観察」　これは，教科としては理科で，５年生が行っている。具体的には，海水を汲んで，その中にいるカニの幼虫など微生物の観察を行っている。実際にはなかなか見つからないが，それこそが勉強ということになる。奈良尾の海岸は，ウミガメが来ることでもわかるように砂浜海岸が続き，海藻が少ないので微生物も少ない。

この他，児童会で海岸の清掃活動に熱心に取り組んでいる（別添資料）。

平成26年６月27日（金）

学校や地域のクリーン作戦をしよう

1　目的

○　学校や地域の環境や人との関わりを考え，自分ができることを行おうとする態度を育てる。

○　集団の一員として，よりよい生活づくりのために協力して諸問題を解決しようとする態度を育てる。

2　実施児童・・・奈良尾小学校全児童

3　内容　　○　高井旅海水浴場のごみ拾い　　○　運動場の草取り

4　期日及び日程等

①期日　平成26年６月27日（金）９：50～10：20

②日程　９：50　　運動場集合，企画・放送委員会による実施方法の説明
　　高井旅海水浴場へ移動
　　９：55～10：10　ごみ拾い活動
　　10：10～10：15　中央のデッキへ集合，ごみの分別・後始末
　　10：15～　　教室へ戻る

③場所　２・３・５年　　中央デッキより西側
　　４年　　中央デッキとデッキの間
　　１・６年　　デッキの東側

④学年担当　１・６年　・・・大下田，江濱，浜迫，川崎
　　４年　・・・浜田，岩永
　　２・３・５年　・・・原，柴田，江口

5　留意事項

ごみは，各担当場所ごとに燃えるごみ，燃えないごみ，缶・びん・ペットボトルに分類する。

6　年間活動計画

	高井旅海水浴場ごみ拾い	運動場の草取り
６月	27日（金）	―――
７月	11日（金）	―――
９月	26日（金）	12日（金）
10月	31日（金）	10日（金），24日（金）
11月	28日（金）	７日（金），21日（金）

12月	19日（金）	5日（金）
1月	30日（金）	16日（金）
2月	27日（金）	13日（金）
3月	20日（金）	13日（金）

8．若松東小学校（所在地：上五島町宿ノ浦郷646）

本校は，1998（平成10）年に上荒川・宿ノ浦小学校が合併，さらに2001（平成13）年に桐古小学校が合併して設立された。児童数が，1年生3人，2年生10人，3年生15人，4年生6人，5年生13人，6年生8人の計55人あり，全ての学年が単式学級となっている。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「高井旅海岸（奈良尾）にて砂の造形活動」　この活動には，全学年で取り組んでいる。活動内容としては，毎年秋の遠足で奈良尾の高井旅海岸まで片道1時間半ほどかけて歩いて行き，砂の造形を作成している。近くによい砂浜がないので，少し遠いけど恒例行事にしている。春の遠足だと1年生が体力的にきついが，半年の成長で問題なく歩ける。

「真珠貝養殖事業体験」　これは，5年生が「産業の学習」として，6年生が社会科の授業として取り組んでいる。活動内容としては，校区内の真珠貝養殖業者を訪ねて，話を聞いたり養殖筏の見学をしたりしている。活動のきっかけとしては，最初に業者の方から声をかけてもらい，見学に行くようになった（別添。実施計画）。

平成26年6月4日

第5，6学年　校外学習（総合的な学習の時間）実施計画

新上五島町立若松東小学校
校　長　　山　下　弘　明
6年担任　田　淵　大　志
5年担任　近　村　直　子

1　学習テーマ　　「親しもう　ぼくたちの海」
2　目　的
○　養殖場を見学して，真珠貝を育てる過程や仕事内容を理解する。
○　新上五島町で真珠貝の養殖が行われている理由や養殖場で働く人々の様々な工夫や努力に気づく。
○　調べようとする事柄を実際に見たり質問したりして深く探ろうとする探究心を養う。
3　期　　日　　平成25年6月9日（月）　　雨天時は11日（水）に延期
4　見学場所　　田崎良幸さん真珠貝養殖場（築地海岸　Tel．44-1225）
5　参加児童　　第6学年　　8名（男子5名　女子3名）
　　第5学年　13名（男子8名　女子5名）
6　引 率 者　　校長　山下　弘明

	担任　田淵　大志，近村　直子	
	講師　原　睦子	計４名
7　日　　程	学 校 発	９時20分
	養殖場着	９時35分
	見　　学	９時40分～10時55分
	養殖場発	11時00分
	学 校 着	11時15分
8　交通手段	桐バス利用（町費負担）	
9　見学の流れ	①児童代表あいさつ	
	②養殖場見学	
	・養殖貝を育てる過程や仕事内容	
	・養殖場で働く人々の工夫や努力	
	・質問	
	③児童代表あいさつ	

10　留意事項
　○目的，日程，見学内容，集団行動について事前に十分指導する。
　○車内や見学先でのマナーについて指導する。
　○安全指導を徹底する。

11　携 帯 品　　筆記用具，見学ノート，水筒，名札，ハンカチ，ちり紙

その他，浜ノ浦「長崎県立上五島海洋青少年の家」でのシーカヤックやシュノーケリング体験学習　これは，５・６年生を対象として，若松中央小学校の児童と一緒に毎年９月に実施している。なお，本校では，修学旅行も若松中央小学校と一緒に，５・６年合同で長崎，熊本，佐賀などを回っている。

９．浜ノ浦小学校（所在地：新上五島町続浜ノ浦郷168-1）

2003（平成15）年に飯ノ瀬戸小学校と合併して現浜ノ浦小学校ができた。かつてのピーク時には児童数400人ほどあったが，現在は児童数１年生が１人，２年生２人（１・２年複式学級），３年生３人，４年生６人（３・４年複式学級），５年生３人，６年生３人（５・６年複式学級）の計18人である。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「海開き集会」　これは，全学年で毎年７月中旬に実施している。ただし，今年は７月14日に予定していたが，台風が来て中止になった。活動内容としては，学校前の海水浴場にて，海への誓いの言葉を唱えたり，レクリエーションをしたりする。活動の目的は，海への敬愛の念の育成と命を大事にする子どもの育成にある。

海の近くにありながら，現在は子どもたちが海に接する機会が少ない。ただし，子ども同士で釣りにはよく行っており，子どもたちにとって海はとても身近な存在である。

「海岸の環境学習」　これは，総合的な学習の時間に５・６年生を対象として毎年７月に実施している。活動内容としては，学校近くの海の環境学習として，海の生物観察，水質調査，漂流ゴミの清掃などを行っている。清掃では，大きなゴミ袋100～200近くにもなる。ほとんど

が中国，韓国からの漂着物である。

「潮騒の中での体験学習」　これは，総合的な学習の４時間，学校行事としての４時間を使い，５・６年生を対象として，毎年７月に実施している。学校のすぐ裏手にある「長崎県立上五島海洋青少年の家」での指導下，シュノーケリングやシーカヤック体験を行っている。

その他，①浜ノ浦の沖合にある石油備蓄基地見学会や，②10月下旬，長崎大学教育学部の学生による離島実習（約１週間）があり，海に関わる交流事業や彼らの来島に合わせて島の祭りを行っている。なお，祭りは，住民の高齢化で実施が難しくなってきていたところ，８年前から長大生が来てくれて参加してくれるので助かっている。

10. 有川小学校（新上五島町有川郷1719-2）

本校は，児童数１年生42人（２クラス），２年生28人，３年生37人，４年生33人，５年生39人，６年生46人（２クラス）の計225人あり，島内最大規模の小学校である。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「アサリの育苗状況調査」　これは，総合的な学習の２時間を使い，３～６年生を対象として６月に実施した。活動内容としては，貸し切りバスで海岸まで行った。もともと隣の東浦小学校でやっていたのを今年引き継いだ。地元の業者からの誘いで実施した。エイがアサリを食べるので，どのくらいのアサリが育っているか掘り出して調査する。探し当てたアサリは子どもたちが持ち帰って家で料理して食べた。

その他，①「海岸の清掃活動」　遠足で，幼稚園児と小学生が一緒に小川原海岸へ出向き，清掃活動を行っている。清掃後，皆でミナ（貝）を獲ってそれを湯がいて食べた。活動の目的は，環境教育の一環であり，同時に幼稚園児と小学生が仲良くなる機会でもある。
②「ゲスト・ティーチャーによる海に関わる講話・見学など」　これは，総合的な学習の時間を使って，インターネットで調べたり話を聞いたり鯨賓館[4)]に見学に行ったりしている。

児童は，地元のことなので，海，水産業に興味はあるが，魚釣りに行くことはないし，海は普段遠い存在となっている。

11. 有川中学校（新上五島町有川郷809）

本校は，生徒数１年生62人（２クラス），２年生67人（２クラス），３年生65人（２クラス），特別支援学級（２クラス）４人の計194人あり，上五島中学校に次ぐ規模を誇る。本校での海洋教育（体験授業）のおもな取り組みは，以下のとおりである。

「海岸清掃とレクリエーション活動」　これは，学校行事として，全学年で毎年４月に取り組んでいる。活動内容としては，新入生歓迎遠足として，近くの蛤浜海水浴場に出向いて海岸清掃を行った後，レクリエーションとしてサンドアート（砂の造形）を皆で作る。

「潮干狩り」　これは，特別支援学級生徒（４人）が日常生活の科目として毎年６月に行っている。活動内容としては，生徒４人と教員３人が参加して，バスで奥浦海岸（鯛ノ浦近く）まで行って潮干狩りを行った。

「蛤浜で遊ぼう」　これも７月に行ったもので，蛤浜でサンドアートを作った。

「海岸清掃活動」　これは，学校行事として，毎年10月に全学年で取り組んでいる。活動内容としては，学校対抗駅伝大会を行った日の午後に蛤浜の清掃活動を行っている。

その他①「総合学習としての地域学習」を実施している。グループで興味のあることを学習

する。具体的にはインターネットで調べたり，見学や話を聞くなどを行っている。テーマとしては，クジラとかうどんなどが出てくる。②「職場体験学習」は，２年生を対象として，毎年６月に３日間実施している。それぞれの希望で分かれて様々な職業体験活動を行っている。その中で海に関わる職業としては漁協などに生徒が行っている。

その他，**北魚目中学校**（所在地：新上五島町小串郷770）

北魚目中学校については，聴き取り調査は実施していないが，他校での調査時に独自の取り組みとして，以下の話が出てきた。

「ワカメ養殖体験」　この活動の目的は，五島の海を大事にするという意識をもたせるためである。

３．まとめ

以上，新上五島町にあるおもに11の小中学校における海洋教育に関する授業などでの取り組み状況についてみてきた。

新上五島町は，離島とは言えかなり規模が大きく[6)]，各校に通う児童・生徒を取り巻く状況も様々であるが，学校の立地環境と各校における海洋教育の取り組み状況については，大きく分けて以下の３タイプに分けることができる。

①町場に立地する，いわゆる‘町っ子’の集う学校

日常生活において，海に接することがほとんどなく，保護者や地域住民にも海や漁業に関わる仕事をしている人が極端に少ない。ここでの海洋教育は，まず,「海に親しみ海を知ろう」から始まる。それでも，学内・外の方々の熱心な働きかけもあって，海の観察や清掃活動，稚魚放流体験，魚料理作りなどいろいろな取り組みがなされている点では，離島でない地域の学校での活動に比べれば，はるかに優れた取り組みと言うことができよう。

②沿岸立地ながら，地域に漁業者がほとんどいない学校

離島で周りを海に囲まれているとは言っても，当然のごとく全国的な傾向と符合して各地で漁業者の減少は著しい。特に沿岸と言っても，近くに漁港のないような場所に立地する学校では，距離的に非常に近い海が，意識の上で子どもたちにとってはるかに遠いものになっているところが多い。したがって,こういった学校での取り組みも①の町場の学校の取り組みと同様,まず「海に親しみ海を知ろう」から始まる。

③沿岸で地域漁業活動が盛んな地区の学校

こういったところでも，近年は保護者に占める漁業関係者は減りつつあるが，それでも海に関わって生活している人の多い地区では，子どもたちにとっても海は距離的にも意識の上でも非常に近い存在となっている。浜遊びや釣りなどに親しむことも多いが，昔と比べると素潜りなどの技術はかなり落ちている。魚料理も普段家でやっていて上手な子どもが多い。

このほか，島の全小中学校での海洋教育の拠点となっているのが浜ノ浦にある「長崎県立上五島海洋青少年の家」であり，ほとんどの学校で全学年，あるいは特定の学年で，ここでの日帰り，ないし宿泊学習として，シーカヤックやシュノーケリング体験学習を行っている。この「海洋青少年の家」の果たしてきた役割の大きさが強く印象に残った。

以上，新上五島町を事例として，海に周りを取り囲まれた離島における海洋に関わる教育の

現状についてみてきた。今後の課題として，海への地理的意識的距離に差がある多様な地域で，そういった差が海洋教育の実践に当たってどのような影響を及ぼすのかを明らかにするための事例研究に取り組んでいきたい。

本研究を行うに当たっては，2014年日本財団海洋教育促進プログラム（事業ID:2013153131）の助成を受けた。記して感謝申し上げる。調査に当たって情報の取りまとめと学校への連絡等でお骨折りをいただいた新上五島町教育委員会の山田恵氏，現地でお世話になった小・中学校関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

注

1）海洋基本法（平成19年４月27日，法律第33号）。
2）海洋政策研究財団（2011）：「21世紀の海洋教育に関するグランドデザイン」，同webページ，http://www.sof.or.jp/jp/topics/11_08.php。
3）調査は，2014年８月19日～22日に，宮崎大学教育文化学部経済地理学ゼミ夏季合宿調査として実施し，その研究活動の一環として，当地区内小中学校における海洋教育の取組について，聴き取り調査を行った。
4）長崎県立上五島海洋青少年の家とは，長崎県立青少年教育施設の１つであり，新上五島町浜ノ浦にある。最大収容80人まで可能な宿泊施設と海洋や山岳体験のメニューがあり，県内各地からの合宿客が多い。
5）鯨賓館とは，新上五島町有川にある捕鯨の歴史が展示品や図書コーナーで紹介されているミュージアムである。
6）新上五島町は，面積213.94 km²，人口22,076人（2010年国勢調査）を有する。